

七 聞いたか風の早合點

物は半途聞では困ると共に、早合點の半可通では尙困る。生兵法は大怪我の元ぢや。聞いたか風の我心得顔は、信仰上以ての外の禁物である。『維摩經』の中に、佛法を聞くことの出来ぬ八種の困難を數へてある。地獄にをるため畜生にをるため、盲聾瘡癩のためと云うやうに、八難を出してあります。その一に世智辯聰の難といふのがある。これは世の中の事にあんまり賢く、智慧もあり、辯舌もまはる、一寸物わかりのよい人は、却つて佛法を聞信することが六ヶ敷と申されたのである。解の早い小才のある人は、深く我身に思入ることもせず、しんみり御法に耳を傾けないで、只才に任せて當場を云ひ抜け、胡魔化しをやる。よくはわからぬでも、そこくに早合點して、どうかかうか世間を甘く胡魔化す事の出来る質の人は、世間向はよくても、信仰上には駄目である。人前は甘く胡魔化すことは出来ても、自分を胡魔化すとは出来ぬ。自分はよし一時胡魔化しても、生死交叉の押し詰つたギリぐの時になると、最早胡魔化しはきかぬ。悔懼交々至ることは請合であります。海老は初白いが茹ると赤くなると聞いて、すればあの鎗の柄も茹いたのかと思ひ。種物の袋には、夫々名前を書付けて置けと命ぜられて、「此の中に親爺あり」と蚊帳に書付けた小供や。頭と顔との區別は、髪のある處が頭で、髪のない處が顔だと、先生に教はつて祖父の禿頭を眺めつゝ、「可笑いく、祖父ちゃんの顔は後に廻つてゐて、額は無茶に廣く頭はない」と云つた様なのが、聞嚙の半可通と云ふもの。矢張りこんな素賢い子供が文字を習ふとて、先生に一二三を教へられ、一の字は横棒を一本、二は二本、三は三本と聞くなり、「先生もう解りました、四は四本五は五本でせう」と云ひざま飛んで歸つた。「お父さん私はもう字は皆覺えた、何でも出来る」。「そんなら手紙を書

いて呉れ、隣村の萬兵衛さんにやる。「よしきた」と一室にかぐんだが半日
経つても出て來ぬ。何をするかと親爺さん「もう手紙は出來たかい」と室を覗
き込めば「未だく。一體萬兵衛なんて、あんまり數が多過ぎる、一生懸命
棒を引いても、やつと三千三百三十三しか出來ぬ。この有様では二三日は掛
からう」と云つたさうな。

任せよとあるから任せました、任せたら氣樂なものと、重荷を下した
感じもなければ、安堵した思もないのは、任せただけでなく放つたのである。
信任は放任と違ふ。そんな處には自力もないが他力もない、全くの無力であ
る。只で助けてやるとの仰せなれば、念佛でも稱へて功德を參らせたなら、
餘計に助けて下されると心得。腹が立つても慾が起つても、お慈悲々と片
付ける様なものは、數字は棒を引きさへすればよいと心得た様なもの。

初めから疑のかゝらぬ聽聞なら贖物である。まだ大事が懸らぬのである。
本當に大事が懸つたなら疑ふが當然である。疑ひ疑ひて、疑ふことの出來ぬ
やうになつて、茲に初めて信仰が得られたのである。夫迄は聽聞を心に入れ
ねばならぬ。